

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1. 生育状況

1番果房は早期作型で収穫終盤、普通作型ではバラつきが大きく、定植の早いほ場では二果目～三果目収穫が中心となっています。2番果房については、12月の出蕾調査では11月の高温の影響で内葉数が多く、昨年と比較すると果房のステージは全体的にやや遅くなっています。(図1) 2番果房収穫開始は1月中旬ごろとなり、2月中旬が2番果房出荷のピークとなる見込みです。

灰色かび病の発生、ハダニ類の増加が見受けられます。特にハダニ類は春先にかけて増殖させないように一番果房収穫後に徹底して防除を行いましょう。

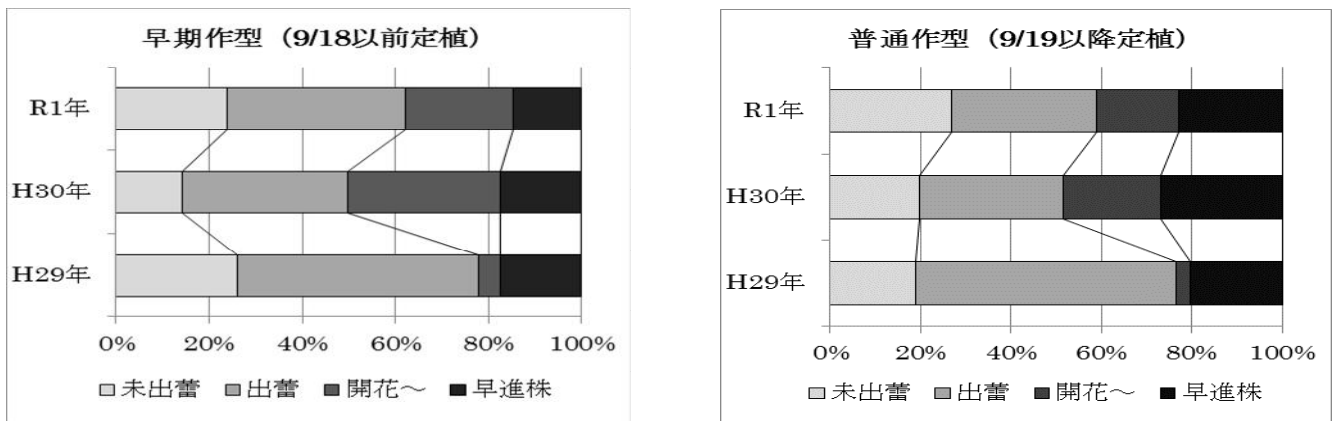


図1 年度別2番果房出蕾状況 (南筑後普及指導センター管内12/9～12/13調査)

2. 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

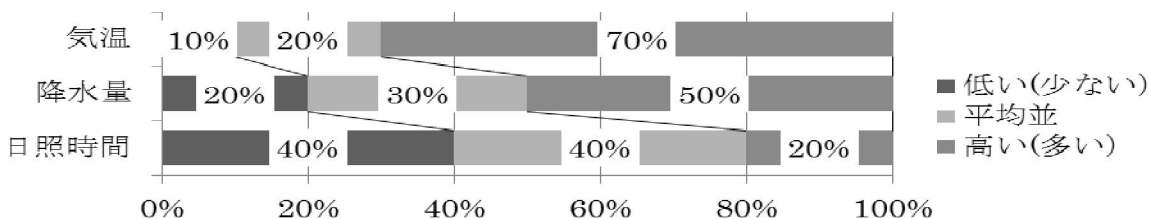


図2 1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 12月21日～1月20日 発表日12月19日)

(2) 今後の見通し

1か月予報では平年より気温が高い予報となっています。また、1月は曇りや雨または雪の日が多い予報となっています。温度やかん水管理をこまめに調整しましょう。

3. 今後の管理

(1) 温度管理

- ・2番果房の収穫開始までは、昼温を高め管理し、心葉の展開や果房生育を促進する。収穫開始後は、昼間の温度をやや下げる。
- ・電照時間を延ばしても心葉の伸びが悪い場合や、展葉速度が遅くなった場合は管理温度を上げる。(設定温度を上げる、午前中は遅めに換気する、夕方早めに閉めこむ等)

表1 温度管理の目安

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1 番果房収穫終了後 2 番果房出蕾～肥大期	24～28℃	5～7℃	2 番果房の生育促進と、3 番果の早期出蕾を目的として高めの管理
2 番果房収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理

※ 寒波が予想される場合はあらかじめ夜温を高めの温度設定にしておく

(2) 電照管理

- ・ 年内に株が立ち上がりすぎていても、心葉が低くなっている場合もあるので注意する。
- ・ 電照の効果は1週間～10日後に現れるため、わい化してから電照時間を延長しても手遅れとなる。心葉の展開位置が、外葉より低くなり始めたら、電照時間を延長する。
- ・ 電照時間は、2時間～4時間の範囲で調節する。
- ・ 夜温が高いと、電照効果は高くなる。
- ・ 厳寒期は立ち上がりすぎているようでも、電照を完全に切らないようにする。

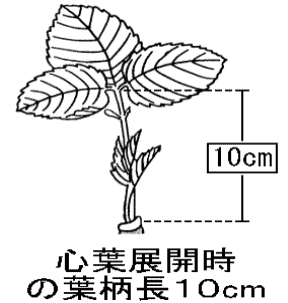


表2 電照時間の調整の目安となる葉柄長

電照時間	時間を延ばす	現状維持	時間を短くする
心葉の葉柄長	9cm未満	9～11cm	11cm以上

<4番果房花芽分化時期>

【早期作型】 12月下旬～1月上旬

【普通作型】 1月中旬

※ 12月下旬～1月中旬は4番果房の花芽分化時期にあたるので極端な電照延長を避ける。

(3) かん水

- ・ 地温を下げないように、晴天日の午前中にかん水する。
- ・ 暖房機の稼働時間が長いと乾燥しやすくなる。そのため、高めの温度で管理する場合、葉からの蒸散量が増えるためかん水量を増やし、こまめなかん水を心がける。
- ・ かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝の葉つゆ状況を適湿状況の目安とする）。

(4) 施肥

- ・ 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- ・ 液肥は、株が弱らないよう定期的に施用する。しかし、株が旺盛な場合は、春先に急激に立ち上げる原因になるため、液肥の施用を減らす。

(5) 草勢維持

- ・ 草勢が弱く株のわい化が予想される場合は、ジベレリンの散布を行う。
- ・ 成り疲れを軽減するために、発根促進剤（チャンス液、パフォームソイル等）を定期的に施用する。

(6) 株整理

- ・ 収穫が終了した果梗枝は早めに除去する。果梗枝が残っていると、展葉抑制及び果実キズの発生、果梗枝折れの原因にもなる。
- ・ 無駄な養分を使わないように、ランナーやどろ芽は除去する。
- ・ 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- ・ 葉陰などで果実に光が当たらないと、黄種果が多くなるため玉出しを行う。
- ・ 株整理は、収穫量の少ないうちに行っておく。

(7) 摘果

- ・ 2 番果房の摘果は、草勢や果梗の形に応じて摘果を行う。

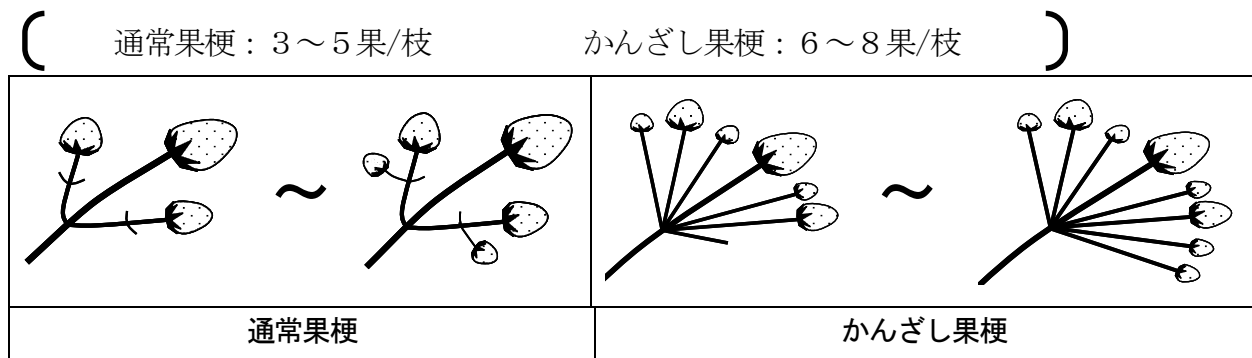


図3 通常果梗とかんざし果梗の摘果のしかた

(8) 病虫害防除

○うどんこ病

- ・ 湿度 80～100% で発生しやすいが、乾燥条件でも発生する。
- ・ 軟弱徒長した株に発生しやすいので、多発したほ場では昼間をやや低めの温度管理を行う。
- ・ 発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。

○灰色かび病・菌核病

- ・ 今後、本格的に寒くなるにつれ、ハウスを閉めこむことが多くなり、湿度が高くなりやすいため、灰色かび病・菌核病が発生しやすくなる。
- ・ 湿度が高いと発生しやすいため、できるだけ換気を行う。
- ・ 曇雨天日などは、暖房機の送風や循環扇を活用し、結露を抑える。
- ・ 最低夜温が高く暖房機が稼働しないことが予想される日には、設定温度を上げて暖房機を稼働させる。
- ・ 発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。

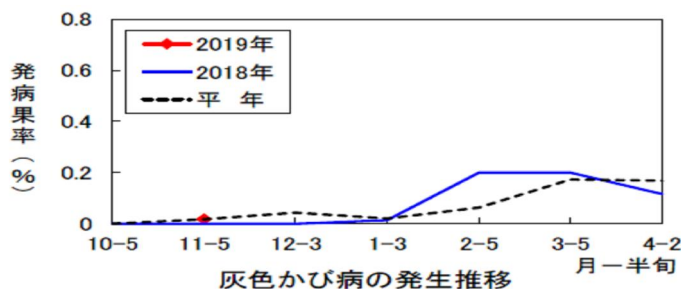


図4 2019年度 福岡県における灰色かび病発生状況 (11月29日発表、福岡県病虫害防除所調査)

○ハダニ類

- ・ ハウス内の出入口や谷など、毎年発生しやすい場所を注意して観察する。
- ・ 活動の衰える厳寒期に防除を徹底し、2月以降の急増を抑える。(株整理の後が防除に最適)
- ・ 寄生した葉の除去はすみやかに行い、ほ場内や周辺に放置しない。
- ・ チリカブリダニ (天敵) の放飼は、1月中旬～2月上旬に行う。
- ・ チリカブリダニ (天敵) を放飼する前に、天敵に影響のない農薬を散布し、必ずハダニ類を徹底防除してからチリカブリダニ (天敵) を導入する。

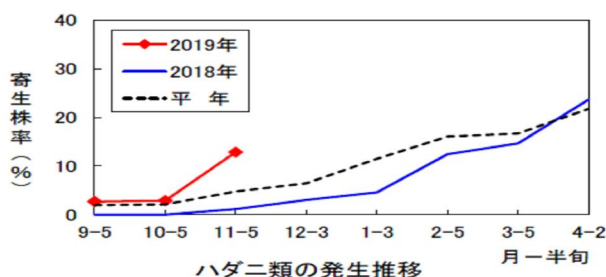


図5 2019年度 福岡県内におけるハダニ類発生状況 (11月29日発表、福岡県病虫害防除所調査)

(9) ミツバチ管理

- ・農薬散布する場合は、巣門を閉める等、危害が出ないように注意する。
- ・影響のない農薬を使用する場合でも、ミツバチを巣箱に回収し、薬液が乾いてから活動させる。
- ・厳寒期に低温や曇雨天日が続く場合は、クロマルハナバチの導入も検討する。

特集「イチゴの獣害被害を防止しましょう」

タヌキ等の獣害による果実の被害が見受けられます。また、イチゴ果実への直接の被害はないものの、モグラやカラスなどの痕跡もハウス内外で見受けられます。獣害の被害が見られた場合は、痕跡をしっかりと確認し、対策を行いましょ。また、ハウス周辺の環境管理に心がけましょ。

モグラ・カラスの特徴

○モグラ

- ・地中深さ 30 cm から 1 m にトンネルを掘り、その中で生活する。
- ・トンネルは本道と側道があり、本道は巣から採食場へ行く通路となる。
- ・足で踏みつぶしても、数日以内にトンネルが復元されていたら本道であると考えられる。
- ・肉食性であり、直接農作物を食べることはないが、採餌のためにトンネルを掘ることにより、作物の根を切ってしおれさせることがある。
- ・ハウス周辺に侵入防止用の柵や忌避剤を設置するなど、事前対策が重要となる。

○カラス

- ・雑食性であり、幅広い食性を持つ。
- ・ほ場付近に生ごみなどがあるとカラス類を誘因することがあるため、ハウス周辺への廃棄を避けるなど、適切な処理を行う。
- ・プランター内の IB 化成などをついばんで動かす、散らかすといった行動をとる。
- ・上空からだけでなく、歩いて侵入することもあるため、側面からの侵入も注意する。
- ・防鳥ネットの設置やテグスを 1 m 程度の間隔で張ることで侵入を防ぐ。

イチゴを加害する獣害の特徴

○タヌキ

- ・4本指で犬に似た足跡になり、指先に爪の跡がつくことが多い。
- ・前足、後足ともに足跡は長さ 4cm、幅 3cm 程度。



図6 タヌキの足跡

○イタチ

- ・5本指の足跡。アナグマに似ているが、アナグマよりも小さい。
- ・しなやかで細長い胴体に短い四肢をもつ。



図7 イタチの足跡

○アナグマ

- ・鋭い爪が目立ち、5本指で指が短い。
- ・前足の足跡は長さ 5.5cm、幅 6cm 程度。
- ・後足の足跡は長さ 6.5～8cm、幅 5～6.5cm 程度。



図8 アナグマの足跡

(農林水産省 野生鳥獣被害防止マニュアル及び鳥獣被害防止対策支援研修資料より抜粋)

「慣れ」と「油断」が事故を招きます
「安全」な農作業と農薬使用を徹底しましょう!